

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

1

Vol.47 No.1 JANUARY

2024

カンファレンス再考

みんなで考えるこの子の最善のケア



連載

もっと知ろう！障害がある子どもと家族のくらしの支え方
重症心身障害看護師の活動

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第31回 同じ窓の下

今、20年後の未来にきたのだなと思った。あの頃の見慣れた顔ぶれだ。将来が不安だった時代の、高校の同窓会。

仕事はしてみないとわからない。結婚もしてみないとわからない。人生にはいろいろなわからないがあるが、同窓会の味わいも年を重ねてみないとわからない。折り紙のように幾重にも時間が重なった面白みがある。

結婚して子どもが成人した人もいれば、離婚して次のステップを歩んでいる人もいる。仕事で大成している人もいれば、転職している人もいる。流れた時間の分だけ、紡がれた物語は尽きることがない。同じ窓から飛び出した私たちの人生の途中経過だ。

同窓会を再団結(リユニオン)という英語では、同窓会のニュアンスは伝わらないのかもしれない。福沢諭吉も記している、同じ窓の下で学んだ、というニュアンスだ。

高校生のとき、実は「だれそのことが好きだった」とか、「本当はお付き合いしていた」とか、マジックの種明かしを聞いているようで、窓の内側で起きていたあれこれに驚いた。そして、当時の自分の未熟さも思い出され、苦くて恥ずかしいような気持ちと、あれから大人になったのだなという感慨が混ざり合った。

そういえば、小児がんの病棟から窓の外を見ることがあった。壁いっぱい大きな窓だ。桜が揺れるときもあれば、雪がちらつくのを子どもたちと「わーっ」と

言いながら眺めたこともあった。病室にたくさんの光を運んでくれた。病院のレストランの窓から、夜空にきらめく花火が見えるときもあった。同じ窓から外を眺める子どもたちは、そうして季節をひとつ越して、友だちになっていった。

朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど
飽かぬかも

正岡子規

この短歌には、病床にあった子規が、初めて窓に透明なガラスがはめられ、その透明さの向こうに見える上野の森の景色に喜んでいながらも含まれているという。子規自身の日常生活を素材としながらも、ガラスに対する静かな感動が躍動している。外の世界が見える窓は希望であり、救いでもあったのかもしれない。

でも、窓の内側にいると、花びらを運ぶ風も吹かない。雪が染み込んだような空気の冷えも感じない。弾けるような花火の音も聞こえない。木々が揺れているのが、コートにくるまった人々が、空高く上がる火花が見えるだけ。

小児がんの子どもたちは早く退院して窓の外に出たかった。私も高校生のとき、やっぱり窓の外に出たかったのだ。見ているだけは嫌だったのだ。その強い気持ちがあざあざと蘇ってきた。

佐藤聡美

さとら・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。